

# Tatsumi Takuro



俳優

インタビュー

## 辰巳 琢郎

京都

少年時代は、あこがれの街  
大学時代は、青春を燃焼させてくれた街  
そして、今またこの街は  
とても暖かくボクを迎えてくれる、  
第二のふるさとのようだ

取材・文 あさかよしこ  
写真 ガリー中西  
協力 ホテル阪急インターナショナル





# 本屋で立ち読みできなくなった



ロビーでくつろぐ人々の視線を浴びながら、あたりの空気を制するように背筋を伸ばし、彼は約束の場所に現れた。今見つけられている男の輝きを、思い知らされる。「すみません、遅くなってしまって」コート脱ぎながら、ペコリと頭を下げる。その表情が、クイズ番組で、たまたまうまく答えられなかった時の、困ったような、恐縮したような少年っぽい風情と良く似ている。思わずホッとする。

劇場「飛天」一月公演の昼の部を終えたばかり。このあとのスケジュールもいっばいにつまんでいる。「去年は、思い切り仕事の範囲を広げちゃいましたからね。この不況の時に」(笑)

この一年あまりの間、TVの画面で彼の顔が見られなかった日は、おそらく一日もなかったはずである。CM、ドラマ、グルメ番組、クイズ番組、旅のレポート、バラエティー番組の司会、そして舞台。その忙しさのさっかけとなったのが、フジTV系の「平成教育委

員会」。そのあさやかな所帯ふりて「優等生」を獲得して京大出身の肩書を納得させ、育ちの良さを思わせるさわやかさが、好感度を高めた。「波というか、流れというか、一種の雷崩現象のようなものがあるんですね。どういうのかな、自分は何も変わっていないつもりでも、まわりからの見られ方、扱われ方が違ってくるもんだなと思いましたね」

たとえば

「日常的なところでは、本屋で立ち読みしづらくなったとか、僕電車が好きで良く乗るんですけど、アッチコッチに僕のポスターが貼ってあって居場所がなくなってしまうたり(笑)。何気なく行きつけの店の名を口にしたばかりか、その店にお客さんがドッとつかけて、かえって迷惑かけてしまった(笑)。洋服を買うのでも、昔は一張羅感覚で一生けんめい選んで買っていましたけど、今は時間がないし、どうしても数も多く必要になってきましたから、吉田淳先生のを……コレもそうなん

ですけど……何セットというような買い方になってしまいましたね。もちろんこの世界、売れてなんぼというのはありますから、こういう時期も大事だとは思っていますけど」

何の気負いもなく、淡々と語る正直さかとても気持ちがいい。

その彼が昨年暮、はじめての著書「青春のヒント」を出版した。

彼自身の少年時代、学生時代の瑞々しい感性をうかがわせる回想と詩、受験生のための心得と勉強法、人々とのふれあい、そのほか種々な想いを綴れ織りにした、半自伝風のエッセイ集である。「はじめはライターにお願いして、僕が話したことをまとめてもらっただけですけど、その時口から出る言葉と、自分で書く言葉とは違うじゃないですか。違うと思いませんか?」

わかる、とてもよくわかる。

「ホ、自分で書いているうちに、思ってもみなかったことが、浮かんできたりすることがある

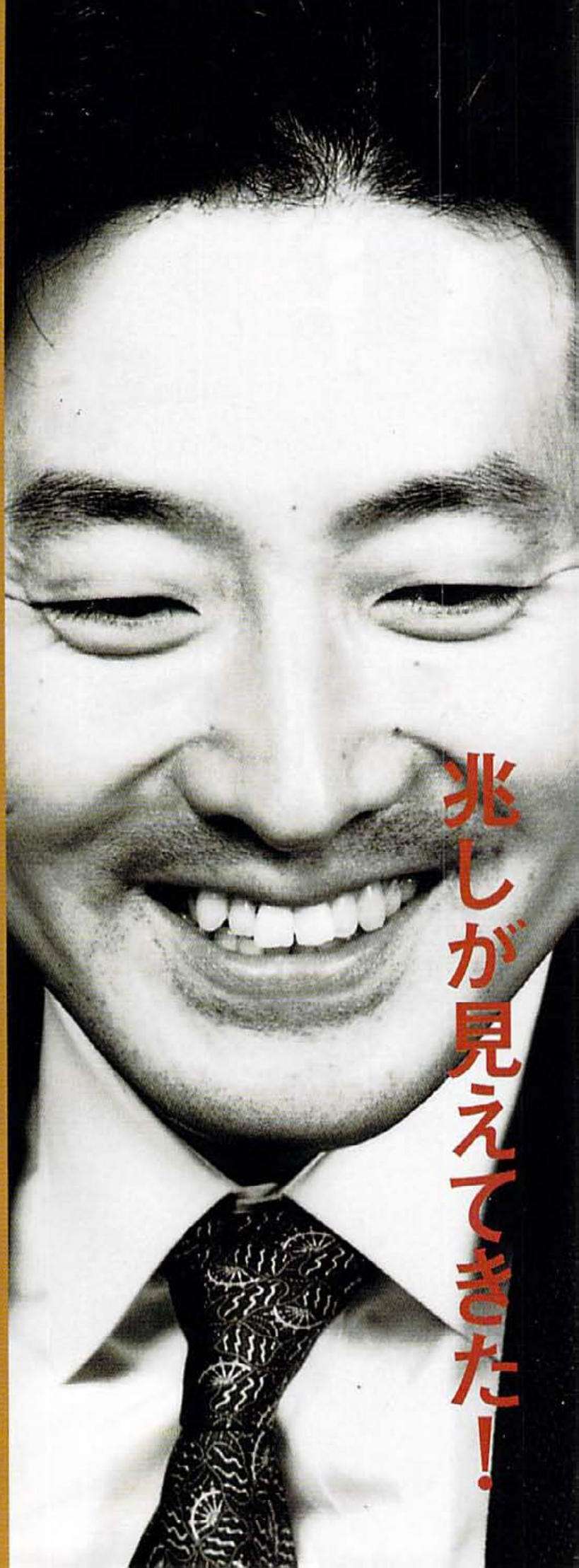
けど、口述になると、そう言ったかもしれないけど、違う!これは自分の思っていることじゃない!っていうことが出てきてしまうんですよ。だからもう、自分で書き直そうって、ほとんど一から書き直したんです。夜仕事終わってからワープロ打つでしよ。睡眠時間がほとんど一時間か二時間。体がガタガタだったし、イライラもしましたけど、その方が自分で納得できますからね」

この、ある自信に裏付けられた、律義なまでの几帳面さが、いかにも彼らしい。

「僕はね、思っていること、言いたいことがたくさんあるけれども、言う前に役者としての基礎をちゃんと築いておきたいんですよ。そうしないと説得力がないでしょ。評論家にはなりたくないんですよ。この本の中だったら、少々の言い過ぎくらいは、あってもいいかもしれないけど(笑)」。今の辰田琢磨だったらもう大丈夫、胸のすくような切り口で、大いに「思い」を語ってほしい。



# The SPECIAL Real INTERVIEW Face



兆しが見えてきた!

左と右では、横顔の印象が少し違ってみえる。シャープで知的な左の横顔にくらべて、右の横顔が甘いのは、やんちゃ坊主の名残りの、エウホのような小さなキスと八重歯のせいだ。  
 端正で、おむらかで、挫折とかコンプレックスという言葉とは、まるで無縁のように見える今の彼の著書の中に、思いがけない事柄を見つけた。  
 デビューして5年、30歳の頃の年表の中の「……何度、俳優をやめようと思ったことか」という一説。  
 やや気兼ねしながらも、その事に触れると「ウーン……」  
 長い間（ま）があつて、はじめて少し口にもる。「この先、経済的にね……ウーン……早く結婚してしましたしね、ちゃんと妻子を養っていけるのか……とか、本当に自分が役者に向いているのか、とか……そういう風に考えたことがありませんね、何度か。特に

30歳ごろってというのは、男も女も、いろんな意味で転機になるでしょう？ まだやりなおしが効くだろうとか、このままだったらいけないとか……そのころは、僕も思うような役ができなかったし、自分の仕事に対して自信がなかったんでしょね。自分がいくらこれだいたいと思っても、人に認められなさやいけないでしょ？ そのままの状態で、中途半端に仕事しているのが、つらかったですね」  
 進学校でありながらも楽しく活気に満ちていた学校生活、劇団「そとばこまち」のリーダーとして、東大「夢の遊民社」の野田秀樹と並び称された京大時代、そして華やかなTVデビュー……、その順風満帆であるはずの航海の途中で、ふと行く手を見失いそうになったあの時期。「何考えていたんだろうな、あのころ」  
 少し遠い目になる。

「手に職でもつけようかなと思ったりもしましたね。勉強しなおして、医学部にはいって、医者にならなろうかなんてね」  
 そんな時に、思いがけない仕事が入り込んだ。関西TV深夜のディスカッション番組「どうさやさ」のパーソナリティ。毎週20人ほどの学生や社会人が集まって、それぞれ自分の言葉で自由に討論をする。在日韓国人の問題、動物園の必要性について、戦争について、愛について……  
 この番組で彼は、それまでのドラマでの印象とはひと味もふた味も違った、知的な輝きを見せてくれた。  
 自分では司会が苦手だと、文字とおりに苦しいながらも、彼は、みんなができるだけ生（なま）の言葉で、正直に話せるように努力をしたという。  
 「僕としては、ほんとにプラスになった番組でしたね。はじめてトップに名前

が出ましたしね（笑）。」  
 波に乗る兆しが見えて来た。  
 やがて人気番組「くいしん坊、万歳」の9代目くいしん坊として登場。この番組のタイトルには堂々と「阪巴塚郎の」ということわり書きがついている。  
 ドラマの役柄も少しずつ変わってきた。特にNHK朝の連続小説「京ふたり」では、京漬物の老舗の若社長という、仕事にも遊びにも長けた大人の男を、みごとに演じて見せてくれた。「これは自分の役だ！ 自分以外に絶対できるヤツはいない！ そう思い始めた最初でしたね。じっくりやっていける番組に出会えた事は大きかったですね」  
 仕事に対して愛着が出て来た。  
 「自分の番組なんだから、少々しんどくても責任もってやる……それでないと、ちゃんとできない性格なのかもしれないですね。僕は（笑）」



# 「つみつくろく」の青春

関西テレビ「たけし・道具の平成教育委員会」より



昨年、理想の父親像の人気投票で、何と彼は、2位の緒形拳に大きく差をつけて、トップの座を獲得した。

「僕が父親のトップなんて、そんなトシになっただんてしようかねえ（笑）」

と複雑な笑い方をするのだけれど、父親だけではなく、雑誌のアンケートでは、理想のキャスター、理想の夫、理想の先生、親戚にいてほしい人など、全て上位にランクされている。単にあこがれの人のいうよりは、現実身近にいてほしい人ということなのだろうか。

そんな包容力とバイタリティーが、十分に生かされた彼の役柄の一つに、NHK大河ドラマ「信長」での、浅井長政役がある。まさに適役。中でも、妻の兄である信長の襲撃に会い、死を覚悟した長政が血を吐くような思いで妻子に別れを告げる壮絶なシーンを好演、その回の見せ場を独り占めにした。

「あれは本当にいい役でしたね。見せ場をじっくりと書き込んでいただきましたからね。脚本が田向正健さんだったんですよ。「ロマンス」の時の、デビューした時の作家に認めてもらえたということが、ものすごくうれしかったですね。」

NHK朝の連続TV小説「ロマンス」でデビューして10年。けれども彼の芝居歴は、それ以前の演劇活動を加えると20年近くにもなる。

京大時代、劇団「そとほこまち」の新しい主催者として、彼が名乗っていた名前は「つみつくろく」。プロデュースや演出も手がけ、関西小劇場の旗手として、演劇青年たちの注目を集めていた。

「ぼくは昔から、わかりやすい」ということが、ものに対する評価の前提にあつたと思いますね。お芝居でも文章でも。特に「そとほこまち」時代はそうでした。メジャー路線思考で、商業資本と結びついていいから、とにかく面白い芝居をして、たくさんのお客さんに観てもらおうという主義だったんです。だから僕たちより少し前の、全共闘の生き残りといわれる世代の人達と、うまくいかなかったというところがありましたね。」

京都のほんの片隅で、仲間と芝居に明けくれた7年間の日々が、青春を燃焼させた時代だったという。





# The **SPECIAL** Real Face **INTERVIEW**



## 最終的には やっぱり主役

「男である。まもなく36歳になる。」「男として、一番いい時だと言われるんですけど、去年が良すぎたから、あまり高望みはしないで、少し自由な時間をもつ贅沢もしてみたいと思っています。ただ今年は、役者としての仕事をがんばらないと……」

「僕は自分で客観的にみてもね、特に演技力があるわけでもないし、セリフも稽古の中で、生理的に理解しながら覚えていくタイプで、決して器用ではありませんからね。今後ハイブレイカーとしてやっていくのはツライなというが、最終的に役者やっていく上で、主役ができないとしかたがないなって思ってるんです。やっぱり主役、やりたいな。」

その主役がやってきた。内藤康夫のベストセラー『浅見光彦シリーズ』の浅見光彦役である。それも年間2本のスペシャル番組として。

「愛読者のファン投票で一位にしていたいて、光栄ですし、自信にもつながりますから、ライフワークだと思えるくらいに、まじめに取り組もうと思っています。やるからには当たるように」

知的で鋭い推理力を発揮しながらも、どこか茫洋とした二枚目で、少々マザコンのケがあるせいか、なかなか結婚できない自称ルポライター浅見光彦。なかなか結婚できないという部分そのだけは、イメージがそのまま重なりそうである。

「なんとなくわかる部分がありますね。ほんとには僕も、こういう仕事していません。彼のように自由に生きていたいな。あこがれますね。」

「役者っていうのは、全く色がないというよりは、いろんな色もっていて、ホントはどれかわかんない、っていうのがあると思います。ホラ、同じ白でも、太陽の光りが七色ゼンインが集まって白になるような……そんな風にもって行ければな」

### PROFILE

1958年 大阪生まれ  
1977年 京都大学文学部入学  
在学中、学生演劇サークル「朝日そとばこまち」を主宰。  
NHK朝のテレビ小説『ロマンス』のオーディションに合格。  
初の男性主役のひとりとしてTVデビュー。  
以後、知的で清潔感のある二枚目として幅広く活躍中。  
身長180cm 血液型B型 2児の父

**テレビ** 『ロマンス』『少女に何が起ったか』『夜光の階段』『迷想ゲーム』『Fキドキ欽ちゃんスピリッツ』『ピクアップルは眠らない』『とうきょうざあ』『京ふたり』『闘球団のくいしん坊! 方眼』『もう誰も愛さない』『君長』『たけし・逸見の平成教育委員会』『TVジェネレーション』『世界ふしぎ発見!』『日誌』ほか

**映画** 『情のない男』ほか  
**舞台** 『空想家族』『女3の宮』『迷子の天使たち』『殉愛』『恋しぐれ夢見橋』  
**著書** 『青春のヒント』(Gakken)

